

## Re 板極道

## Re Ban-Gokudo

企画・展示構成 一般財団法人棟方志功記念館

担当：宮野 春香

1964年に刊行された棟方志功の自伝『板極道』。1903年青森市に生まれた棟方が画家を目指して上京するも、板画こそ自分の道だと進み、民藝運動の指導者や疎開先の支援者、妻チヤに支えられながら世界のムナカタと評されるほど活躍し、1959年56歳の時に初めてアメリカとヨーロッパを旅した出来事までを回想しています。

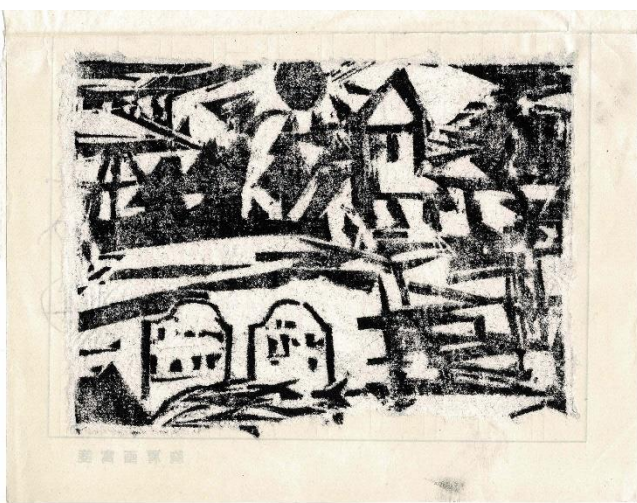
昨年3月、49年の歴史に幕を閉じた棟方志功記念館の最後の展示タイトルも「板極道」でした。奇しくもその展示開催中『板極道』の原稿と挿絵が市場に出、最終的にそれら一式を財団が購入し、今回初めて展示公開することとなりました。『板極道』の原稿は口述筆記の形式で綴られているため、原稿用紙には棟方の手による加筆修正が入れられており、作品制作と同じく筆をとったらとまらない自由奔放な棟方スタイルが見て取れます。この『板極道』の原稿が進行する1963年は、全64点からなる《東海道棟方板画》計7回の取材旅行と制作、約1か月間30回にわたる新聞連載、横幅約13mと棟方最大の板画《大世界の柵 坤一人類より神々へ》の制作、その他装幀本を多数手がけ、夏の青森旅行を断念するほど仕事に精を出した年でした。その多忙さゆえか、板画による挿絵すべてが、出来上がりが左右反転しない拓摺りで入稿されていました。

さらに、棟方が『板極道』の文章を口述筆記した際の肉声のデータも見つかりました。これは、昨年10月に記念館から青森県立美術館へ全作品と資料を移すため整理した際に発見した音声テープをデジタル化したところ『板極道』の口述筆記の内容であることが判明したものです。

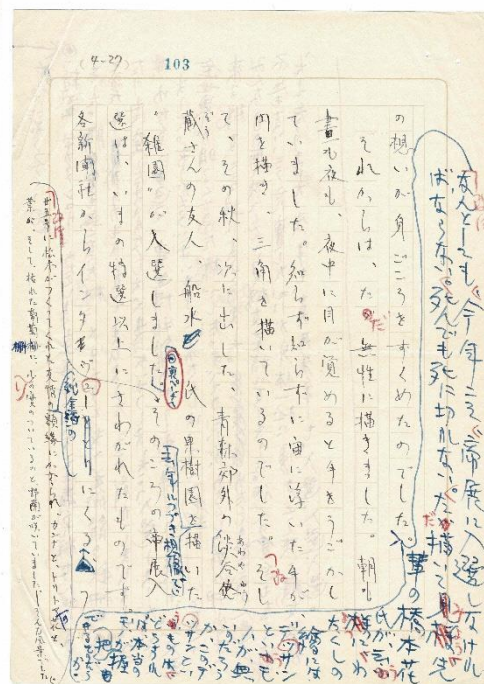
本展示は、これら新収蔵・新発見の資料に加え、棟方志功記念館最後の展示を再構築（Re-build）したものです。複合的に厚みを増した展示をご覧になり、改めて『板極道』を楽しむ機会となれば幸いです。



『板極道』内筆挿絵 墨・紙 12.5×17.0cm 棟方志功記念館蔵



『板極道』板画挿絵 木版・紙 10.5×14.0cm 棟方志功記念館蔵



『板極道』原稿 1963年 鉛筆、インク・紙 24.9×17.5cm 棟方志功記念館蔵



『板極道』書影、板木 棟方志功記念館蔵